

James Piscatori and Amin Saikal. 2019. *Islam beyond Borders: The Umma in World Politics*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press. ix+217 pp.

『岩波イスラーム辞典』によると、「ウンマ」(umma)は共同体、特に宗教に立脚した共同体であり、世界中のムスリムを含みこむボーダーレスでグローバルなものと認識されている。現代アラビア語では民族共同体も指し、クルアーンの語法では特定の預言者と彼に従う人々がウンマであり、ユダヤ教、キリスト教もそれぞれウンマを成している。「ムスリムの世界的コミュニティ」というその理念的な定義や、「ムスリムのアイデンティティ形成の基礎」というその実際の機能により、ウンマは、現代の政治的言明において重要な位置を占めている。本書は、ウンマがムスリムの心情に訴えかける象徴 (affective symbol) として、いかに今日のムスリムのアイデンティティを形成し、社会的・政治的行動を鼓舞しているか、あるいはどの程度決定的に彼らの行動を「後押し」する要因となっているかを探求するものである。

本書がこの問題を提起する背景には、「西洋」がしばしば、ウンマと深く関連する汎イスラーム主義を誇張して脅威と見なしてきたことへの懐疑がある。その他にさらに大きく以下の二つの問題意識を有する。

第一に、ウンマという概念が元々曖昧であることに加え、現代に再構築されているという事情を鑑み、当該概念をあらためて捉え直す必要があるとされる。具体的にいえば、まず、「ウンマ」という単語はクルアーンに様々なルーツがあり、多様に解釈できる。その意味は、中世の思想家の学説から今日の政治的な議論に至るまでの中で、度々定義が試みられてきたものの、依然として曖昧なままであると言える。本書はまず教派間、スンナ派とシーア派の異なる見解を提示する。そして、カリフ制の廃止後におけるスンナ派世界の政治的分裂、及びシーア派におけるイマームの不在といった歴史的要因により、ウンマ概念の再考が促されたと指摘する。それに加え、現代社会における文化的境界線の不明瞭と相互浸透、人の移動、民族自決権の強調といった要素も、人々がウンマ、あるいはムスリム共同体主義 (Muslim Communalism) を再定義し、立て直そうとすることを動機づけたという。

第二に、ウンマがムスリムのアイデンティティと密接な関係を持ち、政治的手段としてよく利用される点について、さらなる検討が必要とされる。ウンマは、狭義の領土ではないけれども、それと切り離して論じることにはできない。たとえば、サウディアラビア王国は、自らがメッカを統治して巡礼を管理していることをウンマの守護と意義づける。また、ISISは、奪取した領域を、あらゆるムスリムが実際に移住すべきウンマの領土だと称して、自らの侵略行動を正当化する。換言すれば、「ウンマ概念は社会的に一定の重みをつけていたが、国家やその他の共同体の政治的現実から切り離されているわけではない。(ウンマ概念は)近代におけるムスリムらの性格 (personality) であると同時に「道具」でもあり、理想的な目的であると同時に操作可能な手段でもあるのである」(p. 8)。要するにウンマへの探求は異なる国家や組織のムスリムのアイデンティティと行動を把握するために必要だということである。

以上の問題意識のもと、本書は、共同体としてのウンマのメンバーシップの範囲は政治的、社会的、神学的に再解釈しようという前提を踏まえ、四つの特定の事例、すなわちスンナ派、シーア派、サウディアラビア王国及び ISIS のウンマの意味的再構築を分析する。

以下では、本書各章の内容を要約したのち、筆者の感想を述べたい。

第一章としての「序章」には上述の旨が説明された後、本書の構成を述べる。

第二章「スンナ派によるウンマの構築」は、中世から現代までの知識人や学者のウンマに対する理解を概観する。そして、彼らが「リーダーシップのないウンマはない」、または「ウンマのないリーダーシップは存在しない」といった主張を述べてきたこと、その上、彼らの間で「信仰のコミュニティは正しいリーダーシップに帰結する」(p. 10)という原則が常に承認されてきたことを指摘している。さらに、ウンマは、もともとムスリムであることを参加条件とする団結や連帯であったが、現在は次第に、メンバーシップの、あるべき範囲の広さとその内実の多様性が問直され始めている、という。最後に、各種の政治行動が繰り広げられる中で、ウンマはある種の政治体制を正当化してきたが、いったんその政体に代表され、手段化されると、ウンマの統一という本来の目的が覆される可能性があるという説く。

第三章「シーア派におけるイスラームとウンマ」は、第二章で取り上げたスンナ派の見解と対比させる形で、イランを例にシーア派の思想と実践におけるウンマの理解を論じている。具体的に言うと、宗教的権威が重視されることはスンナ派と同様だが、シーア派にはスンナ派と異なる独特のイマームの概念があり、系譜の継承と神学的な博識が指導者にとって必須と考えられている。故にシーア派においては、幽隠状態にある最後のイマームが現世に戻ってくるまで、誰がウンマを指導する権限を持つかが重要な論点となっている。この点においてシーア派とスンナ派は大きく異なっているために、本書はこう主張する。すなわち、より複雑な政治的要素を持つ異なる国家間に協力共存の可能性が少ないことは言うまでもないが、たとえ宗教的な次元のみでさえも、ウンマ内の団結はほとんどありえない、と。

第四章「サウディアのウンマに対する『守護』」は、第三章の末に指摘した「ウンマがこれほど分裂的、両極的、混乱的であることはなかった」(p.78)ことの要因、すなわちサウディアラビアとイランの宗派間、地政学上の対立と代理戦争を背景とする、前者のウンマに対する見解を詳しく分析する。その結論は、サウディアの政権が有する、自らが「ウンマをリードする」存在とみなされることへの強い関心が、かえってその目標達成を覆す状況を作り出している、というものである。つまり理想的にはムスリムの統一を目標としているものの、実際のところ、サウディアラビア王国という帝国の、ウンマをリードするとの言明は、ウンマの手段化と自己制限しか引き起こさなかった、ということである。

第五章「ISISのウンマの観念」は、サウディアラビア王国のワッハーブ法制度と対照的なISISのそれを提示して次のように述べる。すなわち、教義を原典主義的、政治的に解釈することにより、ISISは排他的で攻撃的なウンマ概念を醸成してきた。ISISにとってウンマは単なる文面上の概念ではなく、むしろ、美德、統一、敬虔さを備えた理想的な世界である。よって彼らは、不信者のみならず自らの理念に反対する信者もまた討伐の対象だと唱え、暴力を使って浄化して初めて、ウンマを回帰すべき理想のコミュニティとして再建できるのだと主張する。ただし、ISISは自分の行動をウンマ再興と結び付けて正当化しているが、大多数のムスリムはそれを受け入れていない。

第六章としての「終章」は、改めて本書の背景、提起した問題とその結論を振り返る。まず、本書は汎イスラーム主義が偏った眼差しで捉えられ、イスラーム的過激主義としばしば同一視されると指摘している。汎イスラーム主義の源であるウンマ概念は、神学的、教派的、政治的な視角次第でその説明が大きく異なってくる。こうした曖昧でリベラルな性質と、ムスリムの政治的アイデンティティとの強い因果関係により、ウンマは、社会活動家や政治家にとって使いやすいく手段として、はっきりとした道具的性格を与えられている。最後、従来はしばしば知識人や政治的選良たちの視座からウンマに対するムスリムたちの感情の如何が問題にされてきたが、実際、大衆あるいは草の根的なウンマ理解及びそれに基づく実践が決して少なくはないと、本書は提示している。

以下に評者の感想をいくらか述べたい。

汎イスラーム主義はグローバリゼーションに匹敵するほど広範な高い連帯感を醸成するものだとみなされ、ムスリムの一般意識において包括的なアイデンティティの強力な基盤となっている。とりわけ現在ムスリムの人数が勢いよく増えている背景の下では、汎イスラーム主義はもはや政治学、社会学、宗教学といった人文的テーマを論じる際に避けて通ることのできない肝要な概念となりつつある。従って本書は汎イスラーム主義と緊密に結びついている「ウンマ」という概念を取り上げ、当該概念が政治的文脈の中でひっくり返され操作されながら、いかにムスリムのアイデンティティを左右し、彼らの行動を促すかを議論している。本書は、すべての信者の統一体であるとしてウンマを想像することから生じた様々な政治行動の事例を綿密に分析し、現代ムスリム社会の一部における政権の様相と政治活動の実態を浮上させる1冊として、有意義だと言える。特にアル・マーワルディー、イブン・タイミーヤといった中世の著名な思想家によるウンマ概念の議論と、イラン革命、イスラーム協力機構(OIC)の設立などの近現代における国際的な政治の動きとを通時的に検討する本書は、時間の推移による語彙の内実の変容を切り口にその社会的文脈と背景を究明するような考察にとって非常に示唆に富む。

一方、ウンマの意味は、単に政治的な角度からだけでなく、多層的なアイデンティティを有する諸個人によって草の根的に如何に構築されているかという角度からも解読されなければならない。例えば、異なる地域に暮らしているムスリムたちが、イスラーム的連帯や同胞愛によって、パレスチナ問題、ロヒンギャ難

民問題、ないし中国のウイグル族問題などに共感を覚えていると主張する、といった事例が、本書には挙げられている (p.9, 162)。かくして本書はウンマ概念を、イデオロギー的な規範としてどう理解されているかのみならず、民衆の実感としてどう観念されているかという角度からも分析している。このように包括的にウンマを考察する研究は極めて少なく貴重である。

他方、本書は政治理論と現代のムスリムの政治的实践を融合させて分析し、ウンマにもとづく堅く揺るぎない連帯感が存在しているからこそ、ウンマ概念はムスリムから重視され、かつ政治的に操作される契機が付与されたことを明らかにした。しかしながら、本書はムスリム大衆の主体性を看過していることを見逃してはいけない。例えば、汎イスラーム主義のような草の根的な感情に対しても、本書は国家や組織のイデオロギーの視点からのみ論じていた。しかしムスリム諸個人を基本構成要素とするウンマ概念は、現代社会のあらゆる細胞に浸透している原子化と個人化によって瓦解し、再構築される可能性もあるだろう。これは、グローバリゼーションやサイバー技術・空間の発展に由来する。国境を越えた移動がまだ少なかった20世紀中盤までに既にシャキーブ・アルスラーンのような、多民族主義や国境を越えたムスリムの団結を主張するイスラーム復興運動の活動家が活躍していた。アルスラーンに構築された人的ネットワークは東欧のムスリムをアラブ世界と結びつき、ウンマ概念をより具体化させることにも成功したと評価する。一方、国際的な交流が活発になる21世紀においては、個人がアクセスできる、生産できる知識や情報と公共的コミュニケーション空間との関係は膨大な変化を経験していく。それと共に、個々の人間の社会行動に公共性と越境性が生じられ、ムスリム個人の視点からウンマ概念の再構成を模索する余地は大いにあると言えるだろう。

なお、本書は、中東の事例、もしくはムスリムが多数派である地域の事例しか取り上げていない。確かにワッハーブ派によるマレーシアとインドネシアへの政治宣伝とISISのホラーサーン支部については些か言及されたが、それに対する具体的かつ詳細な分析がなされているとは言いがたい。インドネシア、パキスタン、インドに暮らしているムスリムの人口は国別で世界のトップ3であることを鑑みれば、アジアのムスリムによるウンマの様々な再解釈に注目する必要があるだろう。特に東南アジアにおける文化的・宗教的多元主義の中で、ウンマの概念がいかに土着化して展開されたか、また現地社会のイデオロギーにいかなる影響を与えているかが不明瞭である。また、中国においては、20世紀に何人もムスリム知識人が中東に遊学し、現地の各種思想を中国に持ち帰り、翻訳という形で伝播させていった。それらの思想は、戦争、動乱を背景にする近現代中国社会においてどのような変容を遂げたのだろうか。加えてその思想はどのように当時ないし後の世代の中国ムスリム大衆に影響を与えたか。本書はこのような課題に向き合う糸口を提供していると考えられる。

総じて、若干アジア地域の状況を看過していることは否定できないが、本書はウンマを切り口として包括的に現代政治の文脈の下のイスラームを論じ、関連研究の空白を埋めたとと言える。地理的な要素だけではなく、現在では文化、言語といった諸々の人々に内面化したカテゴリーがウンマを分離している。それゆえ本書は政治学の研究者のみならず、現代社会におけるイスラームに関心を持つ者にとっても一読に値するだろう。

(何 家敏 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

近藤洋平『正直の徒のイスラーム』晃洋書房 2021年 xii+372頁

本書は、2013年に著者である近藤洋平によって東京大学大学院人文社会系研究科に提出された博士論文「イバード派イスラーム思想における共同体論の研究」を土台に、現在までの最新の研究を反映させたいうえで大幅な加筆や修正を施した学術書である。表題の「正直の徒」という語は、イバード派(al-Ibāḍiyya)が3/9世紀半ば以降から用いた自称であるahl al-istiḳāmaにあてた訳語である。istiḳāmaという語は、宗教的な観点では「クルアーンの諸規則に従って宗教に忠実である」(46頁)という意味の語であり、スンナ派やシヤア派などと同様に、イバード派でも正直であることが信仰において重視されていたと説明される。イ